



「切り」つつ「結ぶ」メディアとしての〈愛〉： Liebe als Passion (N. Luhmann) 解釈のためのノート

三上, 剛史

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 29:93-116

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000848>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000848>



「切り」つつ「結ぶ」メディアとしての〈愛〉

—*Liebe als Passion* (N. Luhmann) 解釈のためのノート—

三 上 剛 史

はじめに

現代人には当たり前だと思われる、愛によってのみ成り立つ親密な人間関係、典型的には一組の男女（あるいはそれ以外の組み合わせも含めて）の親密な関係性は、決して初めから自明なものであった訳ではない。

地位でも身分でも財産でもなく、ただ「愛」という、捉えどころのないものによってのみ可能となる強い結びつきは、我々が日常的に取り結ぶ様々な社会関係の中でも、特段に異彩を放つ奇妙なコミュニケーションである。

人間の歴史のある時点から、人々が貨幣によって物を購入することを当たり前のコミュニケーションとみなすようになったのと同様に、親密な二人の恋人・愛人・夫婦関係を「愛」という言葉・観念で表象することが一般化したのは、ある時期からである。この特異なコミュニケーションの形がいつからどのように形成され、どのような構造を有しているかを明らかにすること、それがN・ルーマンによる『情熱としての愛』という著作の目指すところである。

現在の社会学的恋愛研究は、近代人の恋愛を「ロマンチック・ラブ」と特徴づけて、その成立過程を辿り、これを「恋愛結婚イデオロギー」と結びつけた上で、近代的恋愛と核家族について論じるのが一般的である。

ロマンチック・ラブと結婚制度を背景にした恋愛結婚イデオロギーの時代的限界性を指摘し、今日、それが制度疲労を起こし、社会的実状との間に齟齬をきたしていると述べることになる。

その際に、ロマンチック・ラブの今後の可能性や限界については様々な指摘があるが、一般的には、恋愛結婚イデオロギーの衰退とは裏腹に、個々人にとつ

ての恋愛（親密な人間関係）の意義はますます高まりつつあると考えられている。

ここでは、そのような流れを承認しつつも、恋愛研究としては、どちらかというと風変わりな、しかし、今後の社会と個人のあり方を占う上で示唆に富んだニクラス・ルーマンの恋愛研究を取り上げたい。

『情熱としての愛』（*Liebe als Passion* : 1982）である。ルーマンは新しいタイプの社会学的システム理論を開拓した人物として知られており、多くの著作があるが、恋愛研究は彼の仕事のごく一部に過ぎず、したがって、社会学的研究においてもこの著作に言及されることは少ない。⁽¹⁾

恐らく、既に知られている社会史や恋愛研究の成果とルーマン独自のシステム理論が並存しているところが分かりにくく、恋愛研究としてはあまりに堅く、システム理論としてはやや事例が特殊過ぎるということが、この著作に対する言及の少なさを招いているのであろう。ただ、ルーマン自身はこの本を自分のシステム理論研究の中心の一つと考えていたようであり、また、自著の中でも重要視していたものの一つであるようだ。

1. ロマンチック・ラブと近代

近代人の恋愛は当人達の愛情によって（それのみによって）結びつくことを理想とする「ロマンチック・ラブ」が理想型とされてきた。社会史的研究はその成立過程を詳しく解きほぐしているが、まず初めに、ロマンチック・ラブの成立史を簡単に辿っておこう。⁽²⁾

(1) 宮廷的恋愛と「捧げる愛」

今日的意味での異性愛の原点が西欧中世の宮廷と騎士社会にあったことはよく知られている。12世紀の吟遊詩人の恋愛詩に始まる「愛」は、中世後期の宮廷文学では「愛の理念」に高められ、騎士道的・宮廷的恋愛において、中世後期には一つの文化として成立する。

騎士が既婚の貴婦人に対して抱く、決して結婚と結びつくことはない「遂げ

られぬ恋」は、宮廷社会という独特の風土の中で、封建的・キリスト教的制度への反抗としての意味を持っていたとも言われている。しかし、ここでの「遊び」に似た愛は一定のルールを持つ、様式化され高度に精神化された「捧げる愛」であった。⁽³⁾

ルネッサンス以後、この中世的恋愛の伝統は貴族社会にも庶民階級にも受け継がれ、次第に騎士道的プラトニック・ラブの特性を喪失しながら、貴婦人が愛人を持つこと（「不義」）も一定ていど社会的に公認されるようなスタイルをとるようになった。ルネッサンスに続くバロック・ロココ期において、恋愛は性的関係との結びつきを形成し始め、昇華された愛という徳の衣を脱ぎ捨てることになる。

その後、近代市民社会の勃興期においても、ブルジョワジーはこの宮廷的・貴族的恋愛を受け継ぐ形で恋愛の観念を継承するのであるが、中産市民階級の生活倫理は貴族社会の倫理観を拒否した。

M・ウェーバー的表現をするならば、近代資本主義を担ったピューリタンの「真面目」なエートスは、既婚女性の「不義」を認めず、また、恋愛の中心は未婚男女の結びつきによる小家族形成に向けられることになる—ただし、プロテスタンティズム自体は、恋愛関係における男女の愛の重要性を特別に強調した訳ではない。

恋愛は一夫一婦制の理念と折り合いをつけねばならず、ここにおいて、恋愛から性的要素を駆逐して恋愛の孕んでいる秩序破壊的傾向を無力化せねばならない。性的なものに向けられた過剰な厳格さによって特徴づけられる「ヴィクトリア道徳」は、愛と性との関係を絶とうとする努力の一つの現われであった。

(2) ロマンチック・ラブと恋愛結婚イデオロギー

近代社会の成立以降、恋愛における情熱の精神的価値を高めることに大きく寄与したのがロマン主義運動である。近代ロマン主義運動によって、恋愛は神聖で至上の価値を持つものとしての地位を獲得するようになる。

改めて指摘するまでもないことであるが、フランス大革命から19世紀初めに

かけて展開されたロマン主義運動の中で、文学としては、スタール夫人（「デルフィーヌ」「コリーヌ」）、ノヴァーリス、シュレーゲル兄弟などが知られている。

ロマン主義運動の根底には、機械化し都市化する産業社会の「非人間化」に抗して人間性を回復・実現しようとする意図があるが、まさにそのような人間性の証しとして、あるいは最後の砦として愛の価値が高められることになった。こうして19世紀のロマン主義運動を通して精神化され至上化された恋愛は、性的関係との結びつきを忌避する形で「恋愛結婚イデオロギー」に結実していった。

この背景に近代化による個人主義的世界観の広がりがあったことは言うまでもないだろう。ロマン主義運動に先立って、ドイツ観念論哲学が自我の主観性と独自の意義を定式化し、その哲学的人間学がロマン主義文学に大きな影響を与えたことはよく知られている。

近代化と産業社会の形成による市民階級の形成によって、個人単位の労働と、個人による人生の選択が求められ、諸個人からなる小家族が形成されて、これが労働再生産の家族的単位となって個人労働を支えるという構造ができ上がる。ここでは、個人は自らの人生設計に合わせて、職業、居住地そして配偶者を選ばねばならなくなる。封建的要素の残存程度によって、国、地方による歴史的・文化的背景の違いや、職業集団ごとに異なったグラデーションはあるが、結婚とそれに結びつく恋愛は、個人が自らの意志によって選ぶものとなる。

そこでは個人の自由意志が最大の規準であり、それゆえに恋愛は個人による、個人の感情を準拠点として展開される心情的出来事としての社会的地位を確立することになった。そのように考えるならば、恋愛結婚イデオロギーの成立が単なる自由恋愛の拡大でなかったことは明らかである。それは社会の要請であり、産業社会の構造が諸個人に求めた秩序側の要請でもあった。

愛という観念とそれに随伴する制度という点から見ると、ロマン主義は中世に起源を持つ精神至上主義的な愛の情熱に新しい意味を付与し、個人の意志こそが最も尊重されねばならぬことを唱導することによって、封建制度の頸

木からまず個人の心情を解き放ち、心情によって現実を超え出ようとする時代の空気を後押しした。

同時にそれは、精神性の重視によって性的乱れを軌道修正し、性的なものの持つ反社会的危険性を骨抜きにする形で結婚と恋愛を「飼いならす」ことにも大きく貢献した。まさに性は適度に抑圧されることによって恋愛を促進し、結婚を奨励するのである。もし、性を個人の自由に任せて「解放」してしまったら、個人はわざわざ責任を伴った「結婚」を選択しなくなってしまうからである。封建社会における婚姻というものがそうであったように、結婚という制度は家と社会を維持するためにこそ必要な制度であった。

恋愛の推奨と恋愛結婚イデオロギーの成立に、我々はM・フーコーが指摘するような意味での社会の姦計を覗くこともできるだろう。近代社会の「生 - 権力」(bio-pouvoir : 国民を生かそうとする権力)は、産業発展のために、富国強兵の基盤として労働者の健康と再生産を求めるのであり、そのためには、性をコントロールして、性を無駄にしない、即ち、労働者とそれを支える核家族の再生産に効率的に向けられるように性を制度に組み込んでゆくことが重要となる。

人口維持を目指して身体と人口を対象とする生 - 権力は、好んでその中間にある性への介入を行うのであり、国民もまたそれとは知らずに性への関心を強め、規制と抑圧の対象であるにもかかわらず、まさにそれゆえに関心の対象であらざるを得ないような形で、性の文化に取り込まれてゆく。

しかし、ロマンチック・ラブと恋愛結婚イデオロギーは、その時代的限界性が指摘されて既に久しい。

2. ポスト近代と親密性の変容

やや前置きが長くなったが、以上のようなロマンチック・ラブの成立史を踏まえて、その現代的意味と現実に向け、「親密性の変容」(A・ギデنز)として捉えられる事態を、改めてルーマンのシステム理論から再考して見たい。

「親密性の変容」はA・ギデنزによる著書の書名である(Giddens, 1992)。

男女の恋愛と結婚に見られる親密な人間関係の基礎となる「親密性」(intimacy)が、現代の「第二の近代」「後期近代」(high modernity)などと呼ばれる時代状況においては、独特の変容を迫られているという主張である。

同様の指摘は多くの社会学的文献に登場するが、『危険社会』(Beck, 1986)で知られるドイツのU・ベックもまた「個人化」する現代社会の重要テーマとして、恋愛と結婚について論じている。もちろん、ルーマンにおいてもそのような現代的变化を念頭に置いて議論が構成されており、親密な関係(Intimbeziehung)と個人化(Individualisierung)はキーワードとなっているが、そこから導出される結論は、ギデنزやベックなどの他の同時代の社会学者とは異なったものとなっている。それこそが本論考の中心であるが、まずは、簡単に「親密性の変容」という事態の概略を押さえておこう。

一般に「親密性の変容」、もしくは「親密圏の変容」というテーマで論じられているのは、現代人はこれまでの時代とは違った形で、自ら相当の努力を払って新しい人間関係を獲得せねばならないという議論であり、その際にポイントとなるのは以下の諸点である。

近年では、核家族における夫婦の性的役割分業と、(日本的表現をするなら)「標準家族」を想定した社会制度一般が機能しなくなっており、これは、女性の自立・高学歴化、男女双方にとっての労働市場における雇用の一般的形態の変化、ならびにそれと連動した様々な社会保障制度の抜本的見直し等々と連動している。

また、リスクを社会的リスクとして処理し、国家、地域、階級、家族などの近代的諸制度によって吸収してきた社会は大きく変容しつつあり、新たな「リスク社会」においては、失業、疾病、離婚、災害・事故、犯罪被害などのリスクは直接に個人を襲い、個別化し多様化したライフスタイルをとる諸個人全般に通用するような処方箋や救済策に頼ることが困難である。

このような情勢下にあって、個人はこれまでの時代よりもいっそう自覚的に自分自身の選択に責任を負わねばならず、そうであるがゆえに、ますます、親密な人間関係に随伴する諸問題は個人の手に委ねられることになる。同時に、

社会の機能分化と政治・経済システムの効率的確立によって、個人は人間らしい感情や自己実現の場をますます親密な人間関係に求めざるを得なくなり、親密な関係に対する要求は高まりつつある。

ギデンズ＝ベックらの議論では、それゆえに、個々人が個人化したリスクや失恋・離婚などの様々なリスクと向き合い、そのつど自己を流動的情勢に適応させる努力が求められる。今や、全ての男女（あるいはその他の組み合わせも含めて）は、親密な人間関係を確立することの困難と課題を引き受けねばならないのである。

ここには、近代的な家族観や性的役割分業、仕事や家庭の長期的安定という思い込みから自由になり、様々な形での親密な関係を容認した上での、自己管理とコーディネイト（＝self-monitoring）が必要となる。もはや、誰も「家族」や「恋人」の上に胡坐をかくことはできず、それが壊れやすく、いつも細心の注意を払って、そのつど維持され更新され続けられねばならぬものであることに目覚めなければならないと言う。

現に西欧先進諸国では、近年になって結婚せずに同居するカップルが増加しているし、若い世代を中心に、結婚制度自体を疑問視する姿勢や、それを想定したライフサイクル設計を行う人々は増えている⁽⁴⁾。

現代人にとって、個人化された人生を歩むことは新しい社会的要請となっており、ベックは「個人化は一つの強制である」とまで言っている。それゆえ我々は、現実の男女の力関係や家族への社会的要請によって「権力によって歪曲されたロマンチック・ラブ」を超えて、新しい形での「純粋な関係性」を志向せねばならないことになる（Giddens, 1992, p.62）。

ルーマンも大筋で同様の見地に立っており、インパーソナル（unpersönlich）な関係の増大とパーソナル（persönlich）な関係の深化という二つの側面を強化してきた近代社会は、今や、その新しい位相に入りつつあるという時代診断である（Luhmann, 1982, S.13：以下、LP. と略記する）。

3. 親密さのコード化

『情熱としての愛』という情熱的な題名の著書でルーマンがしようとしたことは、「愛を感情としてではなく、シンボリックコードとして扱う」という、醒めた仕事である。この言葉の社会学的含意と現代的意義について検討したい。

(1) 『情熱としての愛』

この本は、一面では、中世の「宮廷的恋愛」から「情熱的愛」という形態を経て「ロマンチック・ラブ」という形をとるに至った近代的な愛について、主として「意識的に二流・三流の文学作品」を素材としてまとめられた考察であり、⁽⁵⁾ルーマンはそれを愛の「ゼマンティック」(Semantik: 意味づけの図式)の知識社会学的検討として提示している。

「宮廷的恋愛」(hofische Liebe)、「情熱的愛」(passionierte Liebe: amour passion)、「ロマンチック・ラブ」(romantische Liebe)はそれぞれの時代ごとの愛についてのゼマンティックであるが、その変遷を辿りながら、ルーマンが同時に遂行しようとするのは、もう一つの、社会学的にはより重要な課題である。

『情熱としての愛』というあまり社会学的とは言えないテーマは、実は、社会と個人がいかにして両立可能なのかを問うものであり、前述のギデنز＝ベック的「親密性の変容」に引きつけて言い換えるなら、インパーソナルな社会関係が進展してゆく社会において、諸個人のパーソナルな親密圏は、何を契機として形成されるのかという問いである。

近代人はなぜ「愛」に代表されるような親密な関係性を強く求めるのか。そして、なぜその傾向はますます重要性を増しているのか。また、そもそも「親密」であるとはどういうことなのか。人は何をもって親密の証しとすることができるのか。親密な関係においては、他の何にもまして愛そのものが重要であるのは何ゆえか。ギデنزやベックはこの問いに通り一遍の回答しか与えていない。

これに独自のシステム理論的視点から応えようとするのが『情熱としての愛』

であり、同時にそれは、諸個人の「個人化」というものが、愛という親密な関係性とどのように両立するのかを明らかにするものであり、より根本的には、社会と個人の関係はいかにして可能となっているかを、「愛」というメディアあるいはそのコード化を通して明らかにしようとするものである。

したがって、この著作は恋愛研究の体裁をとりながら、実は、現代社会がいかにして社会関係を形成・維持しているのかを「愛」という側面から明らかにしようとするものであり、『社会の経済』、『社会の法』などのルーマンの他の著作が、「貨幣」や「法」によって社会システムがどのように再生産されているかを示していたのと同じように、それらのインパーソナルな機能システムとは対極にある個人間のパーソナルで親密な関係が、「愛」というメディアによってどのように可能となっているかを解明しようとしたものである。

(2) 愛のコード

愛の「ゼマンティック」（意味づけの図式）を辿る仕事は、最終的には、親密な関係がどのようにコード化されてきたかを確認する作業となる。さしあたりここでは、宮廷的恋愛に続く「情熱的愛」という形を経て、ロマンチック・ラブとして定着した近代的恋愛などから、そこに存在する図式を抽出し、その社会的意味を探ることが課題となっている。

ここで、「コード」と「メディア」という用語について確認して置かねばならない。他の著作ではこの言葉は厳密に定義した上で用いられているが、『情熱としての愛』での用法はそれほど厳格ではなく、読む側は少々混乱する。そこで、ルーマンの意図を損なわない範囲で若干の整理をしておきたい。

コードとメディアの用法は「真理」を例として理解するのが分かりやすい。科学（学問）のシステムは真理をメディア（媒体）として動くコミュニケーションである。ある命題が真であるか偽であるかを確認することが科学システムの課題であり存在意義である。

その際、真理というメディアは「真か？偽か？」という二元化されたコードによって構成されている。したがって、科学システムは、「真／偽」というコー

ドに基づいて、「真」を蓄積してゆくコミュニケーションのシステムだということになる。

ここで、「真」の側が追究され続けるためには、「真理」を探究するということが積極的意味づけを伴っていると便利である。それゆえ、科学システムにおいては真理が象徴的な意味を伴って真理の追究を動機づけ、システムが作動しやすくなっている。このようなメディアが「象徴的に一般化された (symbolisch generalisiert) コミュニケーション・メディア」と呼ばれる。

象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアには、「真理」以外にも「貨幣」や「権力」があり、経済システムにおいては貨幣に、政治システムにおいては権力の追求に向けて参加者が動機づけられる。愛の研究でルーマンが明らかにしたいのは、「愛」が二元的にコード化された象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアであり、これが独特な仕方で親密な人間関係の成立を可能にしているという事実である。

このメディアは、コミュニケーションにおける受容と拒否の不確実性の高まりを、受容に向けて動機づける働きをしている。コミュニケーション主体の自由意志に基礎を置くコミュニケーションの複雑さと期待はずれを、コミュニケーションを成功させる方向に動機づけるものとして、貨幣や権力、真理、愛という象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアが発達してきた。

『情熱としての愛』では(色々な言い方がされているが)愛は「シンボリックコード」、「親密な関係のコード化」などと呼ばれており、愛の二元コードが何なのかも分かりにくい。『情熱としての愛』では、愛の二元コードが貨幣や真理のような明確さで記述されてはいないが、別の著作では愛の二元コードを「愛されている／愛されていない」(geliebt/nichtgeliebt)と表記している(Luhmann, 1990, S.26)。そこで、この表現を用いて、「愛されている/愛されていない」を二元コードとする象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアとして「愛」を理解し、そこから『情熱としての愛』を改めて検討したい。

(3) 移行期のゼマンティック：「情熱的愛」

宮廷的恋愛、情熱的愛、ロマンチック・ラブという順で歴史的に変遷する愛のゼマンティックであるが、ルーマンが注目するのは、近代的な愛の典型であるロマンチック・ラブではなく、むしろ、近代人の恋愛観の基礎にあり、親密な関係性の原点を構成するとでも言うべき「情熱的な」愛の意義である。

情熱的愛は17世紀に成立するとされているのだが、ルーマンに従えば、17世紀には、愛は文学の中で前もって形作られ、家族や宗教に縛られずに自由に愛するという、愛それ自体を志向するゼマンティックを形成するようになる。その結果、一方的な「奉仕」の概念を拠り所としていたそれまでの宮廷的恋愛と違って、愛の「コードを作り上げるための形式が理想化からパラドクスへと移行」することになる（LP., S.82）。

もともと中世における「情熱」の概念は受動的な意味あいを持っていたが、17世紀に入って恋愛の文脈で使用される際には、愛するという行為の能動的側面を指すように変更された。これまでは高貴な女性の身分や美德が崇拜の対象となり、それゆえに手の届かない存在であったものが、この頃には、貴婦人もまた愛する自由を持ち、したがって、愛は愛するものと愛される者との自由意志の選択から成り立つものだと考えられるようになる。

今や愛は自分だけではどうにもならぬ社会的な関係として現れる。すなわち、高貴な夫人の理想化と彼女への奉仕という恋愛コードが、愛に伴う苦痛の自覚へと移行したのである。愛は快いと同時に苦痛と束縛を生むのであり、甘美であると同時に苦難であるという、独特のパラドクスが自覚されるようになる。ここで愛は一方的なものではなく、双方向的なコミュニケーションとして成立することになる。

愛がこのようなパラドクスを逃れられないものであるがゆえに、愛の関係を形作するためには、様々な表現技法に気を配らねばならないが、そこに、愛する者と愛される者とのパラドキシカルな関係を調整するための手続き、言い換えれば愛のコミュニケーションを調整するためのコードとメディアの分出が求められることになる。それは貨幣と同様に、与えられた状況に対して高度な一般

性をもって処理することのできるものでなければならない。

これはまた別の言い方をすれば、愛というテーマが「不安定を安定として明示するのに適している」(LP., S.72) という、ルーマン独自の社会システム理論への導入口ともなる。ルーマンのシステム理論が立つ基本的スタンスは、社会は不安定であるがゆえに安定的に存在するという視点である。一見したところではノーマルなものが、実は不確実性にその根拠を持っているという社会観である。

情熱的愛は、ある時期に成立した移行期のゼマンティックであるが、ルーマンがこれに注目する理由は、情熱的愛という、宮廷的恋愛からロマンチック・ラブへの「移行期のゼマンティック」が、愛というコミュニケーションが人々の個人化に与える手がかりを与えてくれるからである (LP., S.107)。

実は、古典的な「情熱的愛」は親密な関係を二元コード化しようとする企ての始まりなのであり、このことが近代人にとって不可避の個人化と共に進化したという点を見逃してはならないのである。

4. 愛というメディア

近代の社会は、それまでの身分的に秩序づけられた世界から、個々人が自分の人生を選択・設計できる社会として現れた。近代化と共に個人の意識、個人の世界というものが成立したのであるが、同時に、他者とのコミュニケーションにおいては、それまでの身分社会では顕在化しなかったある種の困難が付きまとい、それを解消するためのメカニズムが要請されるようになった。

(1) 相手が分かること、分からないこと：ダブル・コンティンジェンシー

前近代社会において、身分や生得的地位によって諸個人の位置づけが明瞭である場合には、相互理解の不確定性は抑えられている。身分・慣習・儀礼などの安定化装置によって、人と人のコミュニケーションの不確定性は吸収されている。愛に当てはめるなら、身分社会の愛と結婚は、個人の自由意志や情熱に振り回されることのない制度としてあった。

そこに「自由に愛する」というモメントを導入したのが宮廷的恋愛以降の愛のゼマンティックの歴史である。宮廷愛はまだ一方的な理想化と奉仕からなっていたが、「情熱的愛」の段階になると、愛のパラドクスのような形で、行為者相互の意図の不透明性が自覚されるようになる。このような不透明性は、政治・経済などの色々な状況において、社会的コミュニケーションの様々な領域で見られるが、愛のコミュニケーションもその一つである。

近代社会は、身分制度の崩壊と自由な「個人」の誕生、様々な種類の社会的関係の拡大によって、そのつどのコミュニケーションにおいて相手の同意を調達し、相互関係を維持してゆくシステムを必要とするようになった。コミュニケーションする双方の社会的な関係が不確かになることで、身分や出自あるいは宮廷愛的理想化や奉仕に代わって頼りにすることのできる、特別のゼマンティックの発展が刺激されることになる（LP., S.60）。

社会学において一般に「ダブル・コンティンジェンシー」（double contingency）として知られているコミュニケーション上の困難がある。それは簡単に言うならば、コミュニケーションする二人の人間は、相互に相手の出方を予測して行為せねばならぬということである。私から見て相手がどう出るかは不確定（contingent）であり、同時に、相手から見ても私の出方は不確定である。

このような不確定性を解消する手段の一つとしては、一定の事前了解や共通の価値規範が内面化されていると想定することである。それを前提とすることで、我々はコミュニケーションを開始し継続することが可能になる—これが20世紀社会学の代表的理論家であるT・パーソンズの解答であった。しかしルーマンはこの解決策に満足しない。

愛に適用するならば、二人の人間同士の親密な関係は、あらかじめ愛があることの事前了解や共通の愛の世界を事前に共有しているから成り立つのではなく、実際には、愛が不確かで、その愛を確かめようとすることの連鎖によって維持されていると言うべきである。

どこかで永遠の愛が共有される手続き的儀礼があり、それ以降は疑いを挟む余地のない愛が無条件に続くという訳ではない—ロマンチック・ラブの終着点

として想定された結婚においては、「結婚式」という通過儀礼がこのラインを形成することになっていたのだが。

(2) 愛によって愛を支える

愛しあうという親密な関係そのものに目を向けるなら、情熱的愛は、まさに愛するということそのものに価値を置いたゼマンティックであったが、この愛を基礎づけるのは、身分でも地位でも財産でも性でもない。二人の間に愛があるというその事実もしくは想定だけである。

愛は権力でも貨幣でも真理でも性でもなく、愛するということそれ以外に基礎づけを持たないものとなる。愛をお金で買うことも、権力でねじ伏せることもできない。性に還元することもできない。⁽⁶⁾ ロマンチック・ラブはこの傾向をいっそう純化させて愛の価値を高めたが、その出発点は情熱的愛を起点とする、愛するということそのものの価値である。つまり、愛そのものの抽象的価値が初めて認められたのである。

その後のロマンチック・ラブにおいても、また、現代人の一般的恋愛観においても、愛は愛以外の基礎づけを受けつけず、愛においては愛があるということだけが唯一の支えとなる。

各々に独自の内面世界を持つ近代の諸個人にとって、相手の気持ちを完全に推し量ることは困難あるいは不可能である。それにも拘わらず、お互いを親密な関係にある掛替えのない存在として承認しあうにはどうしたらよいか。言葉や行為それ自体は誤解を生みやすいものであるし、事実、親密な関係においても言葉や感情の行き違いはしょっちゅう生ずる。そうなる相手の愛を指針とするしかない。二人の間に愛があるとみなすことだけが、様々な誤解・歪曲・離反から親密な関係＝愛を守っている。

真理や貨幣というメディアがそれ自体は何の実体もないものであるのと同様に、愛という言葉・観念それ自体には何の実質もないが、様々な感情が愛の名の下に語られ、行為の基礎となって現れ、コミュニケーションされる限りにおいて、他の何物にも替えがたい固有の価値を持つことになる。

本当のところは分からないという愛のパラドクスが愛を支えているのであり、そこではブラック・ボックスがうまく処理されて、まさに、ブラック・ボックスを隠蔽し、パラドクスの顕在化が回避されることで、コミュニケーションが円滑に進行している。

本源的所有を基礎づけることはできないが、(本当は誰の物かを確定することなどできない) 品物の所有権を“お金の支払い”によって確定し、究極的真理は不在・不明であるという事実を、一定の手続きを経て証明された“真理の共有”で確認し、同じように、本当の愛が不明であるにも拘わらず、むしろ不確かであるからこそ余計に、“愛している”ということを再確認しあって親密性を維持するのである。

ある命題が真理と判定されることで科学のシステムが成り立っているように、様々な振る舞いや感情が愛に見積もられることで、親密な関係は維持されてゆく。比喩的な表現をすれば、親密な関係性に愛という「ラベル」を貼り、相互に愛という「お札」を交換し続けることが、愛しあう二人の関係性を可能にしている。

お札の具体的な形は、愛を表現する言葉や行為、立ち居振る舞いの全てであるが、あたかも貨幣を交換する場合と同じように「愛」が使用されている。愛というラベルは「真理」というラベルに似ており、愛の交換は貨幣の交換に似ている。真理も貨幣も近代になって自律化した「象徴的に一般化されたメディア」であるが、愛もこれらと同種のメディアなのである。

このような愛をルーマンは「人と人との相互浸透」(zwischenmenschliche Interpenetration)と呼んでいる。親密な関係における相互浸透においては、特定の相手の心的営みが自らの営みの糧となり、相手の体験を受け入れて、それに沿うように自分が行為するということが成り立っている。愛する者は、予め相手の気持ちを汲み取ってそれに志向して行為する。「愛する者だけが愛の行為をとることができる」。

「愛は相手の意識システムの世界に方向づけられているのである」(LP., S.220)。一方の行為は他方の体験世界の中に嵌め込まれなければならない、相手

の意識システムにおいて体験される世界を機軸として再生産される必要がある。お互いがそのように振舞うとき、愛という相互浸透が生産・再生産される。このことをルーマンは、愛する者が愛される側の体験を志向して行為し、そのようにして二人の間の（愛される）体験と（愛する）行為とが接続・編成されるのだと定式化している。

この関係においては、双方がお互いに配慮していることを知っているので、相互浸透は見かけ上のコミュニケーションを超えて行われる。ただしこれは、前近代的な没個性的同一化や神秘的合一とは異なる。親密な関係は、独自の個性を持った他者への配慮と関心を前提として成り立つのであり、それゆえ、このような親密さは、始めの内は上層階級においてのみ可能であった（Luhmann, 1984, S.306f.）。情熱的愛が宮廷と騎士社会を母体として生まれたということにはそれなりの理由があったのである。

（3）愛の逆説

親密な関係における相互浸透では、相互に相手の存在が、自分自身が存立するための条件となっている。「想像力を駆使して相手の自由を処理し、相手の自由と自らの願望とを融合させる」のである（LP., S.62）。ただし、この営みはいつも違背のリスクに晒されている。

高度に個人化し、諸個人が独自の内的世界を保持し、相互に外からは垣間見ることのできない心的世界を確立した段階では、個々人の意識は独自のものとして閉じている。このような個人の意識を、ルーマンは「社会システム」と区別して「心的システム」（*Psychisches System*）と名づけているが、ここでは「意識システム」と呼んでおこう。

実際には相互に閉じて交わることのない二人の人間の各々の内面世界（二つの独立した意識のシステム）を、あたかも緊密に結びついたものであるかのようには表象するためには、それに寄与する独特のメディアが必要となる。

なぜなら、我々の意識は他者の意識と交わることはないし、テレパシーで融合する訳でもない。もし、他者の意識が直接に自己の意識に浸透してきたら、

それはS Fか精神の異常として診断されるだろう。

相互にお互いを鋭く区別することで可能となっている近代人の意識は、貨幣や真理のような媒体を使用することによって、能率的で間違いがなく、また予期が可能なコミュニケーションを遂行している。言語もそもそもはこのように閉じた意識同士のコミュニケーションの手段として発達してきたものだが、そこから、貨幣という道具や真理という観念がメディアとして分出することで、複雑なコミュニケーションを簡便なものにしている。

愛もまたそのような目的を伴って発達し分出したメディアである。貨幣や真理が、それに代わるメディアの存在を許さないのと同じように。愛は今や独自の抽象性と一般性を獲得し、他の何物によっても代替されない独自性を獲得した。

愛という言葉・観念それ自体には中身がないのは、真理それ自体などというものが考えられないのと同じである。ある命題が「真理であるかどうか」に過ぎない。真理というメディアは自ら何の中身も持たないからこそ、あらゆる事象に適応される。紙幣は紙切れに過ぎないからこそ何とでも交換される。愛も同じである。様々な言葉や振る舞いが「愛」というメディアで総括されていく。「愛されている」のか「愛されていない」のかというコードの「愛されている」という側が選択され続ける限りにおいて、親密な関係が維持される。

しかし、愛は逆説的である。親密な人間同士であっても、あるいはそうであるからこそ余計に、閉じた相互の意識システムが生む誤解や期待はずれから逃れることはできない。既に「情熱的愛」の段階で自覚されていた愛のパラドクスを解く道、すなわち、完全な愛を確認する道は、初めから閉ざされている。

にも拘わらず、二人の間に親密な愛の関係が存在していると思えることができるのは、「逆説的な言い方だが、愛はコミュニケーションを大幅に断念することによってコミュニケーションを強化することができる」からである（LP., S.29）。

「本当はどうか」を完全に確認することはできないがゆえに、むしろ雑音となるコミュニケーションを排除し、ただ愛があるということ、二人の間に愛が

あるということのみが指針とされざるを得ない。そういう想定を可能にすることが愛というメディアの独自の機能である。だから「愛を感情としてではなく、シンボリックコードとして扱う」ことに意味があるのである。

複雑化した現代人の心情を完全に描写したり理解したりすることは困難である。自分自身にとってさえ、自分の感情は不分明で制御不能なものである。としたら、様々な種類の曖昧な感情の生起はそれとして、ともかくも、愛という一本の筋に収斂するものとしてそれらを表象することができれば、コミュニケーションはずっと簡便になり、「複雑性が縮減」されて、コミュニケーションに際しての負担が軽減される。

しかし、そうだとしたら「本当の愛」に行き着くことはできない。愛はメディアに過ぎず、「愛されている」というコードが選択されたことを示す媒体に過ぎないからである。言うまでもなく「愛し、愛されている」ということの具体的表現や状態は千差万別であるし、だからこそより本物らしい愛を志向するのだが、愛そのもの＝「本当の愛」に至ることはない。本当の愛は「本当」という虚構である。虚構ではあるが、有益な、しかも虚構であることが意識されない、上手くできた虚構である。

それゆえ本当の愛を追求することは、どこか拝金主義に似ている。「愛」は親密な状態を相互に認知しあい二人の関係を親密なものとして規定するための媒介物である。そのことに気づかないから、しばしば人は、本当の愛を求める余り、どのような具体的な愛にも満足できない愛の遍歴者になってしまう。

恋愛小説や恋愛ドラマ、恋愛マニュアルetc.は愛に中身がないことを効果的に隠している。J・ボードリヤールの用語を用いるなら、それらは様々な恋愛から「いいところ」を取り出して寄せ集めた「シミュラクル」(simulacre：理想型として作り出された寄せ集めの幻影)である。だが、愛のユーザー達にとっては有効な動機づけとなり、親密な関係という可能性に向けて現代人の自我を開くように促している。

愛があるかどうかは、愛があるとするかどうかにかかっている。一方が相手を愛することによって相手の世界を志向しつつ気遣い、行為する。同時に他方

が、愛があるという相手の言葉と行為を愛の存在として受け取る限りにおいてのみ、愛のコミュニケーションはあるのであり、相手の愛の言葉を愛として受け止め続ける限りにおいて、それのみによって愛は存在し続ける。そのこと以外に、二人の間に愛が存在することを保証するものは何もない。

それゆえ、愛というメディアの存在は愛の不確かさに基づいている。愛という親密な関係は、かくも不安定で頼りないものであるが、逆に、愛さえあれば磐石であるという意味では、それだけで独立した、他の何物によっても邪魔されることのない確かな社会関係であるとも言える。

小括：個人「と」社会

現代人の意識システムは高度の再帰性を獲得して閉じている。社会生活の上で、諸個人は役割、地位、権利・義務関係において社会的に開かれているが、個人の意識それ自体は閉じている。言葉や習慣は社会から学んだものであっても、人格が形成され、自分の言葉と自分の心を持つ段階に至ると、人の意識は閉じる。それが個人化の一つの重要な帰結である。

このように閉じた自我が、それにも拘わらずお互いに対して開かれて緊密に融合するという仮象を持つことができるとしたら、それは愛というメディアを使用することによってである。個別に切り離されてしまった諸個人が、無味乾燥なインパーソナルな社会関係ではなく、親密でパーソナルな関係を形成するための条件として、愛というメディアが分出したということになる。

愛というメディアについてのこれまでの検討から、一つの重要な前提が再認識される。それは、個々人の意識システムは（それを「心」と呼ぶ人々もいるが）閉じていて、他者とは繋がっておらず、現代人の自己意識はますますその傾向を強めているという事実である。

「恐らく今日の社会は、純粹にパーソナルな世界を築くことへの動機づけという点から見れば、より強くその方向に向かっていると言える。しかし他方で人々は、今やそれがどんなに大変なことであるかをようやく知り始めているのである」(LP., S.215)。

個々人がまったき独立した存在であるからこそ、個人はより多くの自由と責任を背負うのであるが、そうであるからこそ「閉じた」存在である個人は、お互いに世界を共有できる相手を強く求めることになる。しかし、それらの存在が交わることはない。

つまり愛というメディアは、本当は交わり合えるはずのないもの、分かろうとすればするほど分からないことに苦悶するというパラドクスを、理解し共感し合えるものとして処理し繋ぎ合わせる機能を果たしている。閉じた心同士が、愛によってのみ開き融合するという形を取ることができるのである。そのような働きをする愛の価値は、現代のように個人化の著しい時代においてますます高まらざるを得ない。

個人相互の共通性が担保されていれば、コミュニケーションの価値は相対的に低いものに留まる。社会と個人の双方が分化し始めて、個人同士の共通項が希薄になると、コミュニケーションすることの地位は高まり、とりわけ、通常のコミュニケーションを超えてお互いの内面に相互に浸透しあうものとされる特殊なコミュニケーションの形＝愛の価値は高騰する。

現代人は、自らの意識を閉じたものとして体験するがゆえに、なおさら愛に依存する。もし、相手を完全に理解し、双方が心の一致を確認できる地点があるなら、愛を続けようと努力する必要はなくなる。愛が続くのは、そのようなポイントが存在しないからである。愛が愛を完成させることができないからこそ、愛は存在し続けるのである。

「愛」は、二元的にコード化された象徴的に一般化されたメディアとして機能することで、もはや、「情熱的愛」とか「ロマンチック・ラブ」という意味づけ（ゼマンティック）を必要としないものとなり、状況の多様なコンテキストを高度の自由度をもって処理し、同時に、愛に向けての動機づけを可能にするコミュニケーション・メディアとしての地位を確立した。

我々は貨幣というメディアの交換によって経済的コミュニケーションを遂行し、真理というメディアを用いて科学的コミュニケーションを達成するように、愛というメディアを使うことによって親密な関係性を築いているのであり、イ

ンパーソナルな機能システムの分化が高度化することによって、近年は、愛という特殊なメディアの価値がますます高まりつつある。

愛は万人に開かれたメディアであり、誰もが特別の資格や資質なしに用いることのできるメディアとなった。しかし、経済や科学の世界とは異なって、マニュアル化することが困難な「親密な関係」においては、愛というメディアの使用は、お金で物を買うように簡単にはゆかないのも確かである。

「愛」という言葉には色々な意味があるにも拘わらず、ルーマンが恋愛における愛にのみ注目していることに、読者はやや奇異な印象を抱くかも知れない。⁽⁷⁾だが、ギデنزらが指摘する「親密性の変容」という現象を踏まえるならば、愛という言葉・観念が、今や個人の親密圏に限定的に作用するメディアとして分出しつつあるということが考えられる。

ギデنزが親密圏を男女の恋愛・夫婦関係だけでなく、同性愛や親密な友人関係にまで広げているように見えるが、ルーマンは男女の親密な関係に話題を絞って話しを進めている。Liebe がどこまで拡大可能なメディアなのかはまだ見定めがたいが、少なくともルーマンは、男女の親密な関係（恋愛・夫婦）を範型として愛のシステムが独自の仕方で分出したことを示したかったようである。むしろ、愛のメディアが友愛や郷土愛などと混同されないことの重要性を示唆しているように思われる。

ルーマンの「愛」はそのような現実を背景として見るべきものであって、それは一方で、インパーソナルな機能的領域（政治、経済、法、学問・科学、教育、医療 etc.）が独自の分化を遂げつつある中で、その対極にパーソナルな親密圏が形成されているということであり、同時に、それらの中間に位置する「神」や「人類」や「郷土」や「兄弟」などの観念が曖昧化し、例えばグローバル化の中で「愛国心」が何なのか分からないなどといった風潮を生んでいるのだという風に理解することができる。

これが「望ましい」事態であるかどうかは別として、ルーマンが指摘する「事実」は確実に進行しているように見える。ますます自己言及的な閉じを進行させつつある個人同士が、一つの親密な関係という「社会」関係を結ぶこと

ができるのは、まさしく、個人と社会の間にある「と」の部分で、「愛」という（それ自体には中身の無い）メディアがある仕方で上手く埋めているからである。そしてそれもまた、貨幣や権力に似た働きなのである。

注

- (1) 邦語文献では、土場（1993）、高橋（2002）などがあるが、国内外ともに、他にこれといった研究は見当たらないようである。
- (2) 以下、井上（1976）、ルーマンなどを参照しつつ概観するが、歴史を辿ること自体が論文目的ではなく、また煩瑣でもあるので、細かい引用等は省略したい。
- (3) N・エリアスは『文明化の過程』（*Über den Prozeß der Zivilisation*: 1939）において、このような宮廷的・騎士道的愛の成立原因を次のように説明している。

中世騎士恋愛歌の担い手であったトルバドゥール達は、比較的身分の低い騎士層出身であり、封建制度が確立していく過程において、大封建君主に従属する存在となることを強いられており、とりわけ、君主の宮廷において君主やその妃の歓心を買うことに力を注がねば自分の地位を維持することが難しかった。

このような情勢において、大封建君主は小規模な騎士に対して自らの対面を保ちたいと願い、また、その表現として主君とその奥方を褒め称えるという詩人と歌人の社会的役割が意味を持つことになる。

トルバドゥール達はその社会的地位の相対的低さと不安定さのゆえに、男性としての自己抑制、衝動の抑圧と断念を強いられるのであり、ここに「抒情詩」による「恋愛」と名づけられる感情表現が、情感の昇華・洗練化として成立したと言う（第3部第1章、訳書下巻）。

フランスのトルバドールを手本としてドイツで12世紀から14世紀にかけて興隆したのが、身分の高い女性への愛＝「ミンネ」（Minne）を歌う抒情詩人・音楽家「ミンネシンガー」（Minnesinger）である。彼らもまた、多くは騎士階級の出身であった。宮廷的恋愛は神学からの攻撃もあって、14世紀には衰退するが、そこで芽生えた情熱的な愛（*amour passion*）の観念は愛の一般的形として広まってゆく。

- (4) この点について、伊藤（2003）に、ドイツでの事例に基づいた生活史研究と日独比較があり、参考になる。
- (5) 特に17世紀という、ルーマンが注目している時代のフランスを中心とした西欧の恋愛小説は、日本人には馴染みの薄いものが多いが、中にはデュルフェ（H. d'Urfé）の有名な牧人小説『アストレ』や、ラフォンテーヌ夫人（Jean de La Fontaine）の『プシシェとキューピドン』などの、よく知られた文学作品も登場する。
- (6) 愛におけるセクシャルなものの位置を、ルーマンは「共生メカニズム」（*symbiotische*

Mechanismen) という用語で表現している。人間同士のコミュニケーションは個人の身体的要素と関わりを持っている。例えば、経済の場合には欲求充足、政治の場合には物理的暴力、科学の場合には知覚（見て確かめること etc.）である。貨幣・権力・真理の各メディアは、欲求充足・物理的暴力・知覚という身体的過程と固有かつ排他的に対応している。

我々は欲求充足や暴力という身体的なものを共通基盤として共同生活を営んでいる。愛の場合にそれにあたるのがセクシャリティである。性は愛というメディアと固有の対応関係にあり、セクシャリティは、性的関係以外では到達できない程度まで、自らの体験を相手の体験として想定することを可能にしている。

しかし、権力というメディアが物理的暴力の排除、あるいはその使用の限定によって可能になっているように、愛もまた、あからさまな性的関係の排除に注意を注ぐのである。だからこそ、17世紀にいたるまでの愛は、性的満足を引き伸ばす戦術に重要な役割を与えていたのであり、18世紀以降、セクシャリティに肯定的な意見が広まってからも、いかにしてセクシャリティを飼いならすかが、愛に関する言説の中心的テーマとなり得たのである。

- (7) 言うまでもなく一般的には、「愛」という言葉には、その内容に幾つかの区別があることは古来よく知られている。「神の愛」（「アガペー」あるいはそのラテン語訳である「カリタス」）に、「神の人間に対する無限の愛」「人間の神に対する愛」「人間の人間に対する愛（隣人愛）」などの意味の層があり、また、「エロス」にも官能的なものから芸術なものまで、あるいはプラトンの「イデアへの憧憬」まで幾つもの段階がある。「友愛」（「フィリア」）が共同体への愛に繋がるアリストテレス的文脈も存在する。近代語でも、love や Liebe は一語で複数の意味の層を表現している。男女の性愛も人類愛（love for humanity）も同じ love という語で（幾つかの修飾語と伴に）表現され、ルーマンが主題としている Liebe も Gottes Liebe と言えば「神の愛」である。

このような愛にまつわる様々な概念の異同については、M・シェーラーの『同情の本質と諸形式』：*Wesen und Formen der Sympathie*. (1923) が参考になる。シェーラーはここで「共感」と愛、憎しみなどを慎重に区別しているが、ルーマンが『情熱としての愛』で取り上げるのは、もっぱら男女の愛という意味でのリーベである。

文献

- Beck, U., 1986: *Risikogesellschaft*. 東廉・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局、1994年
- Elias, N., 1939: *Über den Prozeß der Zivilisation*. Suhrkamp. 赤井・中村・吉田訳『文明化の過程』（上）（下）法政大学出版局、1977年
- Giddens, A., 1992: *The Transformation of Intimacy*. Polity Pres. 松尾精文・

- 松川昭子訳『親密性の変容』而立書房、1995年
- Luhmann, N., 1983: *Liebe als Passion; Zur Codierung von Intimität*. Suhrkamp. 佐藤 勉・村中知子訳『情熱としての愛—親密さのコード化—』木鐸社、2005年
- Luhmann, N., 1984: *Soziale Systeme*. 佐藤 勉他訳『社会システム理論』（上）（下）恒星社厚生閣、1993年、1995年
- Luhmann, N., 1990: *Soziologische Aufklärung 5*. Westdeutscher Verl.
- Scheler, M., 1923: *Wesen und Formen der Sympathie*. Franke, 1974. 「同情の本質と諸形式」、飯島・小倉・吉沢編『シェーラー著作集』白水社、1977年
- 伊藤美登里 2003 : 『共同の時間と自分の時間』文化書房博文社
- 土場 学 1993 : 「愛というメディア」『社会学評論』44-3
- 高橋 徹 2002 : 「愛の関係におけるコミュニケーション・メディアとゼマンティク」『意味の歴史社会学』世界思想社
- 井上 俊 1976 : 「恋愛結婚の誕生—知識社会学的考察—」『死にがいの喪失』筑摩書房